

沈黙も声も：メディアが映し出す政治とジェンダーの力学
Framing Silence and Speech —
— Media Discourse, Gender, and Political Power in
Contemporary Japan

米澤 陽子
Yoko Yonezawa

1. はじめに

2024年1月28日、自民党副総裁で元首相の麻生太郎氏が地元演説で上川陽子外相に言及した発言が、メディアや世論で注目を集めた。麻生氏は、侮蔑的呼称ともされる「おばさん」という語（遠藤 1992: 156-186）を用い、「そんなに美しい方とは言わんが」「やるねえ」などと発言した。これは外交手腕を評価する文脈におけるものであったが、「女性ですよ」「俺たちから見ても」といった表現を通じて、男性を基準とする政治観を示し、外交で活躍する女性政治家を例外的存在として語った。また、上川氏の名前を「カミムラ」と誤り、敬称をつけず呼んだ上で、最後には「女性で、若い人で、こういった人たちを我々は育てねばならん」と述べ、上川氏をリーダーとしてではなく、「育てられる側」のように印象づけた。

翌29日、上川氏は「どのような声もありがたく受け止めている」と述べ、発言への直接の反論をしなかった。この対応は、問題発言に対して声を上げるべきか、受け流すかという問いを呼び起こし、世論の分かれる論点となった。

この事例は、単発的な問題発言としてではなく、日本の政治における構造的なジェンダー不平等を象徴するものとして位置づけられる。日本の女性国会議員の割合はいまだに10%台にとどまり、2025年のGlobal Gender Gap Report (World Economic Forum 2025: 25)でも政治分野の格差が特に顕著である(148ヶ国中125位)。女性議員への性差別的な発言も後を絶たない。

本稿では、麻生氏の発言および上川氏の応答が、主要新聞各紙においていかに言語的に「枠付け」されたかを、言語学の視点から分析する。言葉は、目に見えない形で人の印象や出来事の意味を無意識のうちに方向づける。例えば、「男は女を殺して逃走した」という他動詞構文と「殺された女が見つかった」という受身文は、同じ事件の側面を描いていても、受け手の認識に与える影響が異なってくる。Enfield (2022:6)は、文法や構文といった可視化しにくい言語の仕掛けは、あたかも肘でつつくように、聞き手や読み手の視線を一定の方向へ向けさせる働きを持つと述べている。これは、いわゆる「フレーミング(枠付け)」(Fillmore 1976)という概念ともつながる。

本稿の目的は、上記の事件がメディアによってどのように枠付けられ、そのことが社会におけるジェンダーイデオロギーといかに結びついているかを、言語表現による「見えない肘つき」に注目して考察することである。

2. 理論的視座

本稿では、新聞報道における言語的枠付けを分析するために、互いに関連する三つの理論的視点を導入する。第一に、言語構造が行為者主体性や責任の意味づけに与える影響 (Yamamoto 2008)、第二に、「侮辱と受け止める／受け止めない」という行為を社会的・選択的行為として捉える視点 (Brown 2023)、第三に、日本語の「女性語」イデオロギーに関する社会言語学的知見 (Inoue 2006; 中村 2012) である。

第一の点について、Yamamoto (2008) は、構文選択が発話者の認識や姿勢を反映することを指摘する。日本語には、主語の省略や他動性の低い構文が使用されるという言語的特徴がある。例えば、英語の I have a headache (直訳：私は頭痛を持っている) は、日本語においては「頭が痛い」と行為主体を明示しない構文が自然に用いられる傾向がある。ということは、あえて「AはBをCした」のような明示的な他動詞構文が用いられる場合、それは発話者や書き手が行為者の主体性、責任や意図を強く前景化していることを意味する (Hinds 1986; 池上 1981)。本稿では、この他動詞構文の有標性に注目し、メディアが誰を主体として描き、誰に責任を帰属させているのかを分析の核とする。

第二に、Brown (2023) は、侮辱的発言をどう受け止めるかは単なる感情的反応ではなく、制度的・文化的条件のもとで選択される主体的な社会行為であるとする。上川氏が反論しない選択をしたことが、職業的抑制、品位、迎合、戦略などと、人々から様々な受け止められたことを念頭に、本稿では報道におけるそうした対応の語られ方を比較する。

第三に、本稿は「日本語の女性語」イデオロギーの視座も参照する (Inoue 2006; 中村 2012)。いわゆる「女性ことば」は、「上品」「控えめ」「やわらかい」といった女性像と結びついた、歴史的・社会的に構築された言語イメージであり、実際の女性の発話を忠実に反映するものではない。このイメージは、公的領域における発話への期待や評価にも作用し、抗議すれば「攻撃的」「感情的」、沈黙すれば「受動的」「策略的」と受け取られるかもしれないといった、女性政治家の言語的拘束とも関わっている。

3. データと分析方法

本研究のデータは、全国紙の主要4紙——朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞——の紙面および電子版記事である。検索には「麻生」「上川」の語を用い、発言が行われた2024年1月28日以降6か月間の記事を対象とした。検索語を「おばさん」など特定の表現に絞らなかったのは、報道における言語的・主題的な多様性を捉えるためである。

分析では、まず各社の報道量を字数ベースで把握し、主題別の頻度を比較して、本件に対する立ち位置の違いを概観した上で、本稿の考察の中心となる構文分析を行った。特に、麻生氏および上川氏が主語となる他動詞構文(主語+目的語+動詞)に注目し、行為主体と責任の可視化に焦点を当てた。また、「AはBだ」といった非他動詞構文も検出し、解釈や評価が中立的事実として提示される言語的方略の検討も加えた。

4. 分析

(1) 報道量

まず、報道量の比較であるが、各新聞社の記事の総字数は下記の通りであった。

（表1）事件に関する各紙の総文字数（データ内）

毎日新聞	13502
朝日新聞	12388
産経新聞	10405
読売新聞	795

朝日と毎日とは本件を比較的详细に報じたため、字数も多く、発言の重要性を表現している。両紙とも麻生氏の発言を全文またはそれに近い形で引用し、読者に発言内容を直接伝えようとしている。一方、産経も一定の紙幅を割いて報道しているものの、その長さのゆえんは、必ずしも発言自体の検討に集中しているわけではなく、「言葉狩り」批判や政治的世論操作の憶測など多岐にわたり、論点が分散していた。特に顕著なのが読売新聞の扱いであり、報道の分量は他紙と比較して極端に少なく、発言の直接引用もほとんど見られない。要約的な言及にとどめることで、発言の重大性を相対化する姿勢が見えると言えるだろう。こうした報道量と記述スタイルの差異は、各紙の編集方針や問題意識の違いを反映しており、論調の傾向を把握する手がかりとなる。

（2）各紙における基本的事実の報道頻度

以下の表2、3、4は、各紙の報道が扱った話題に基づき整理したものである。

（表2）事件に関する基本的事実の報道頻度（データ内）

	朝日	毎日	読売	産経
麻生氏による上川氏の容姿への言及	30	11	5	26
麻生氏による上川氏への称賛	5	7	4	9
麻生氏による「おばさん」という語の使用	6	7	1	11
麻生氏の実事誤認／誤った発言	5	5	2	5
上川氏の応答	14	14	0	9
麻生氏による発言撤回	6	14	2	4

表2が示す通り、事件の基礎的事実に関する報道であっても各紙の取り上げ方に差がある。数値は記事中の文を主題ごとにコーディングしたもので、一文が複数の主題に該当する場合は重複して計上している。したがってこれは割合ではなく、各主題に読者がどれだけ触れることになるかを示す実数（出現件数）である。

表3ではさらに、進歩的メディアと保守的メディアの間（一般に「左」・「右」と言われる違い（金子 2021）で、本件をどのような主題に結びつけているかを見た。明らかに、この事件を何に関連させるかという点で、根本的に視座の違いがあることが見て取れる。

(表3) 各紙における社会的・政治的テーマとの関連付け（データ内）

	朝日	毎日	読売	産経
ジェンダー不平等	27	12	0	0
社会的責任	9	11	0	0
文化的・制度的批判	6	6	0	0
政治領域の課題	5	7	0	0
上川氏の実績	7	4	0	0
上川氏のジレンマ	8	7	0	0
社会的弱者の声	11	8	0	0

朝日は、本件をジェンダー不平等（27件）と関連させる視座に重点を置き、男女格差全体への批判の中に本件を位置づけている。毎日もまた、社会全体の責任（11件）を指摘し、制度改革を要する問題として枠付けている。こうした進歩的2紙は、今回の出来事を一過性の失言ではなく、広範な社会的課題の一端として提示している。一方、読売・産経両紙では、こうした制度的・社会的文脈への関連付けはほとんど見られず、本件の社会的意味づけを避ける編集方針がうかがえる。こうした主題選択は、後述する文法的構成における行為主体や責任の所在を表象する表現とも連動している。

さらに表4は、産経が他紙には見られなかった独自の主題選択をしていることを示す。

(表4) 産経新聞における対立的解釈の主題（データ内）

	朝日	毎日	読売	産経
野党政治の一環	0	0	0	24
問題の矮小化	0	0	0	18
進歩的メディア批判	0	0	0	8
「言葉狩り」批判	0	0	0	8
「女性の問題」と限定	0	0	0	7
上川氏の幸運	0	0	0	6
麻生氏の擁護	0	0	0	5

産経は、本件を深刻なジェンダー問題として枠付ける報道に異を唱える視点の構築を通じ、語りの枠組みを転換している。とりわけ、「言葉狩り」といった表現を用いたメディア批判や、野党政治批判（24件）、問題の矮小化（18件）を通して、本件は女性の問題に過ぎない、あるいは進歩的な人々の過敏な反応であるとして再解釈する姿勢が見られる。

以上の3つの表が示すように、4紙は共通の事実に基づきながらも、出来事の語り方において非常に異なる枠組みを構築している。こうした報道パターンの差異を踏まえ、次節では本稿の中心となる記事に現れる具体的な構文の特徴を分析する。

(3) 行為者主体と責任の所在——麻生氏が行為主体となる他動詞構文

(3)節と(4)節では、麻生氏および上川氏の行為が、他動詞構文（「主語+目的語+

他動詞」という文型) によってどのように表現されているかを通し、各紙が行為主体と責任の所在をいかに言語的に構築しているかを比較する。前述したように、他動詞構文は「AがBをCする」というように、行為の主体と客体を明示し、責任の所在をあえて前傾化する構文である。分析では、まず麻生氏および上川氏が主語となっている文を抽出し、その中から他動詞構文を選別した。この節ではまず麻生氏が行為主体となる他動詞構文を見る。

朝日は、麻生氏が主語となる他動詞構文の例が25件確認された。例として下記のようなものがある。

- (1) 麻生氏は過去にも問題発言を繰り返してきた。
- (2) (麻生氏は) 上川氏を「おばさん」とも呼んでおり、
- (3) 麻生太郎副総裁は [...] 自らの発言を撤回した。

例(1)(2)は、麻生氏が主体的に侮蔑的発言を行ったことを明示する表現であり、(3)は、発言を「撤回した」のであるが、ここで見えてくるのは、発言から撤回まで全ての行動の責任はあくまで麻生氏本人に帰されているということである。つまり朝日は、一連の出来事において麻生氏を主語とした他動詞構文を用いることで、行為者としての主体性を明示し、出来事の責任の所在を明確化している。つまりこれは麻生氏の問題だというメッセージである。これに対して、産経が使用する「問題の容姿の発言が飛び出した」といった自動詞構文は、発言が囂らずも飛び出したかのような表現となり、麻生氏の責任を曖昧にする効果がある。

毎日の記事には、麻生氏を主語とした他動詞構文が15例確認された。上の例(1)のような朝日と同じ表現も見られたが、以下は毎日独自の表現の例である。

- (4) (麻生氏は) 本来無関係な外交手腕と外見を結びつけて批評した。
- (5) (麻生氏は) 上川氏を「そんなに美しい方とは言わんけれども」とからかった時、
- (6) 麻生氏は5日後によく、撤回するとコメントを事務所名で出した。

例(4)(5)の「結びつけた」「からかった」という他動詞は、これらの麻生氏の行為が主体的・意図的であるものという枠付けをする。例(6)では、「よくやく」や「事務所名で」といった説明表現が、「出した」という中立的な他動詞に責任回避的な態度のニュアンスを追加している。

読売では、麻生氏が主体である他動詞構文は8例あったが、朝日や毎日のように「おばさんと呼んだ」や「そんなに美しい方とは言わん」などの物議を醸した表現を直接引用する文は見られない。読売において麻生氏を主語とした他動詞構文は、下記の(7)のような、重大性の低い行為においてであった。一方、発言撤回に関する報道では、(8)に見られるように、より長い引用とともに他動詞構文が用いられ、謝罪の文脈を強調している。毎日のように「事務所を通じて」などの修飾は省いている。

- (7) (麻生氏は) 上川氏の名字を「カミムラ」と複数回間違えた。

- (8) 麻生副総裁は [...], 上川外相を巡る自らの発言について、「上川氏の功績を紹介する趣旨だったとはいえ、容姿に言及したことなど表現に不適切な点があったことは否めず、発言を撤回する」とのコメントを発表した。

このように、読売の他動詞構文使用は、問題発言そのものの重みを軽減する一方、謝罪や修正の行為には重点を置く傾向となっている。その結果、麻生氏に対する印象は、朝日・毎日両紙とは異なり、「反省する人物」として構築されているといえるかもしれない。

また、読売では、麻生氏が上川氏を肯定的に語る場面において、使用される他動詞に一貫性が見られる。それらはいずれも「評価する」「評す」といった表現であり、麻生氏は上川氏を「評価する立場」にある人物として描かれていることがわかる。

- (9) 自民党の麻生副総裁は [...] 上川外相について、「英語をきちんと話し、自分で（会談相手の）予約を取る。あんなことができた外相は今までいない。新しいスターが育ちつつある」と評価した。

産経の記事には、麻生氏の行為に関する他動詞構文が 18 例確認された。

産経は、麻生氏の上川氏への肯定的評価を、他動詞構文を用い、非常に積極的な称賛として強調している。麻生氏の発言を肯定的文脈に再構成しようとする意図が見えるようだ。

- (10) (麻生氏は)「堂々と話をして、外交官の手を借りずに自分で会うべき人との（面会）予約を取っている。大したものだ」と外交手腕を評価した。
(11) (麻生氏は) 上川陽子外相の仕事ぶりを「このおばさんやるねえと思った」「そんなに美しい方とは言わんけれども」という言葉を交えつつ絶賛し、
(12) (麻生氏は) 有力候補として「カミムラ」の名を連呼したのだ。

(10) では褒め言葉を長く引用し、(11) では問題発言の部分を従属節にして背景化、主節の他動詞「絶賛し」で、称賛行為を前景化している。さらに (12) では、「連呼した」という他動詞を用いて麻生氏の主体性を前景化し、名前の誤りを単なる事実誤認ではなく、政治的な注目を集める能動的な行為として意味づける語りを形成している。

以上のように、朝日・毎日は麻生氏の問題発言の責任を明示的に言語化する傾向が強く、読売は問題性を軽減し修正行為を強調する一方、産経は発言のポジティブな側面を印象付けようとする姿勢が見られた。

繰り返しておくが、ここで示した各紙の違いは、あくまでも他動詞構文に基づく分析に限定される。他動詞構文は、行為主体を明示することで、話者や書き手の主体性や責任を前景化する文法的資源である。次節では、上川氏が主語となる他動詞構文に焦点を移す。

(4) 行為主体と責任の所在——上川氏の行為を示す他動詞構文

朝日においては、上川氏を主語とした他動詞構文の使用は顕著に少ない。これは、本件の焦点があくまでも麻生氏の責任にあることを強調する報道姿勢を示しているといえる。

朝日は、上川氏の、侮辱と受け止めない選択を主体的行為として他動詞構文で描写してはいるものの、その語彙選択は、女性政治家が制度的制約の中で選択を強いられている様子を暗示している。

(13) 上川氏は [...] 直接の論評を避けた。

「避けた」は他動詞であり、発言をあえて行わないという否定の主体的選択を表す。ただし、朝日はこれを制度的制約への共感的理解とともに示している。例えば、読者投稿欄で次の(14)のような意見を採用・紹介している。

(14) 上川氏も内心は言いたいことがあったはずだと思うが、腹に納めたのではないだろうか。

こうした読者の意見を援用し、朝日は、沈黙が抑制された判断であることを示唆している。興味深いことに、この読者は上川氏の対応に「好感」を持ち、話題は「節度ある、美しい言葉の使い手」と関連づけられている。このように、沈黙や抑制的な態度が「節度」や「美しさ」と結びつけられる語りには、「女性言葉」が要求する控えめさや丁寧さ、間接性が、いまだに公共空間における女性の発話スタイルやスタンスを注視している可能性が暗示されている。それは、女性の言語行動が常にジェンダー化された評価軸にさらされていることを示している。朝日はこうした手法を通じて、女性個人の判断と社会的期待が交錯する複雑な接点を提示しているといえよう。

毎日も、上川氏の沈黙に共感を示しているが、その語彙選択には朝日との違いがある。

(15) 上川氏は問題視しない姿勢を示した。

毎日の例(15)では、「示した」という他動詞が、問題視しない姿勢を積極的に表明したことを表現し、それは回避ではなく、より主体的な選択として位置づけられている。Brown (2023) が理論化したように、「侮辱と受け止める／受け止めない」という選択は、単なる感情的反応ではなく、権力関係を変える可能性を持つ能動的行為であるといえる。

実は毎日の記事には、上川氏を一貫して能動的行為の主体として描き出そうとする姿勢が見られ、上川氏のキャリア実績などを他動詞構文で積極的に紹介している。

(16) 上川氏は、紛争解決などに女性の視点を取り入れる「女性・平和・安全保障(WPS)」の取り組みを推進している。

さらに毎日は、上川氏が政界において前進していく姿も他動詞構文で描き出している。

- (17) 上川氏は2023年9月の外相就任を機に「初の女性首相候補」として存在感を高めつつある。

「存在感を高め」るのは上川氏自身の行為であり、これは、自然と「存在感が高まる」と記述されるような自動詞構文とは異なり、彼女を積極的な行為主体として描く表現である。

だが、まさにそのように主体性を強調する描写が、「麻生氏に反論してほしい」という期待を呼び起こし、結果として失望を招く一因にもなっている。したがって毎日は、上川氏を支持しながらも、批判的に言及せざるをえないというジレンマに陥っている。

- (18) 上川氏は「女性活躍」を標ぼうしているのに、なぜ麻生氏の発言を正面から論評しないのか。

(18) には、上川氏の能力と実績を讃えるがゆえに、その能力を使って性差別的発言に正面から対峙すべきだ・してほしいという期待の裏返しである失望が表現されている。毎日の報道は、上川氏の実績における主体性の賛美と、「慎重な対応＝受動性」と見なす視線とのあいだで揺れ動いている。ここでも、女性政治家の言語行動が、常に評価と意味づけの対象となっていることが見て取れる。進歩的なメディアでさえ、女性政治家の言語的選択に対して一貫した枠組みを持ち得ず、結果として、差別的発言を受けた当事者であっても、その対応の仕方が、さらなる期待や評価の対象となるというジレンマに陥っている。

一方で、産経は、上川氏の行動を政治的計算と捉える視点から記述を展開している。

- (19) 上川氏は [...] 静観のかまえを崩さなかった。

「崩さなかった」という否定形の他動詞構文は、制度的制約による受動的な抑制ではなく、頑固とも言えるほど確固とした戦略的判断として沈黙の姿勢を描き出している。さらに「産経抄」欄においては、以下のような心理描写も掲載している。

- (20) (上川氏は) 胸の内では存外太いことを思っているのかもしれない。

表面的な沈黙の裏に、したたかで図太い意思があると示唆するこの記述は、上川氏を政治的に老練した巧みな操作主体として描く。この構図は以下のような描写とも結びつく。

- (21) (上川氏は) ニュース報道では「上川陽子」と大きくテロップされ知名度を得た。

「テロップされ」は受動態であるが、その後の文を「知名度が上がった」とせず、あえて他動詞「得た」を使用し、上川氏がこの機会を能動的に捉え、それを政治的資本へと主

体的に変換した人物として表現している。さらに、産経は他紙が重視しなかった上川氏の職歴——例えば死刑執行命令を下した歴史——を強調する。

- (22) 上川がオウム真理教の死刑囚ら 16 人に執行命令を下したとの逸話を紹介するワイドショーもあった

「下した」という権威的な他動詞の使用により、上川の制度的権威の行使者としての側面を強調しつつ、そうした厳格で重い職業上の決断をあえて「ワイドショーもあった」という文に入れ込み、ワイドショーで取り沙汰された次元に読者の印象を繋げている。

このように、各紙は上川氏の「声を上げない」姿勢を異なる形で枠付けしており、それぞれの視点が上川氏の主体性をめぐるメディア言説の多層性を浮き彫りにしている。

(5) 出来事の位置づけ——非他動詞構文による枠組み

これまで見てきたように、他動詞構文は行為主体とその責任を前景化する。ここでは補足として、非他動詞構文が、出来事を中立的な事実や自然な流れとして表す側面について、短く触れておきたい。下記の例 (23) (24) は朝日の文である。

- (23) 日本は 146 カ国中、過去最低の 125 位。政治分野では 138 位に沈む。
(24) 今回の発言からは、多数派の男性政治家による女性政治家への「上から目線」が感じられる。

朝日は、「X は Y」構文で、Global Gender Gap Report に記された統計的事実を提示し、発言を客観的な構造的ジェンダー格差の中に位置づけている。また、「沈む」という自動詞や (24) の「感じられる」という自発動詞を用いて、こうした状況が自然現象のように存在している環境を表現する。

毎日も非他動詞構文で、下記のような倫理的判断を命題的に提示している。

- (25) 外務大臣としての能力と外見とは何の関係もない。
(26) 容姿に触れた発言は、人を見た目で判断するルッキズムという差別に当たる。

逆に読売は、麻生氏の問題発言を「～場面もあった」といった非他動詞構文で語り、単に「起こったこと」として、主体の責任性を抑えている。

- (27) [...] と容姿に触れる場面もあった。

産経は、麻生氏が上川氏を「評価した」と述べる際には、行為主体を明示する他動詞構文を用いて主体性を前景化する一方で、「飛び出した」といった自動詞構文では、発言があたかも偶発的に生じたかのように描き、問題発言に対する責任の所在を曖昧にしている。

(28) (麻生氏が) [...] と評価した一方で、問題の容姿の発言が飛び出した。

このように、構文の選択は主体の責任や意図、出来事の重みや社会的意味をどのように構成するか直結しており、各紙の語りの立場や枠組みの構築を反映している。こうした文法資源の選択は、見えにくい形で、まさに肘をつんと突くような具合で、読者の視線をある方向に向けさせるのである。

5. 終わりに

本稿では、麻生太郎氏による上川陽子氏への発言と、それに対する上川氏の応答をめぐる全国紙主要4紙の報道を対象に、構文や語りの枠組みがどのように行為者の主体性や責任の所在を描き出しているかを、言語学的視点から分析した。構文選択という目に見えにくい言語資源が、読者の認識や印象にどのような影響を与えるかを示すため、「見えない肘つき」としての言語的枠付けに注目した。

特に、他動詞構文が行為主体の責任や意図を前景化するという先行研究の知見に基づき、本稿でも新聞各社の構文選択がこの機能を活用していることを観察した。他動詞構文を通じて、朝日・毎日といった進歩的メディアは、麻生氏の責任の所在や上川氏の抑制・判断を描写する一方、保守的とされる読売・産経は、問題発言の責任を最小化したり、上川氏の沈黙を政略的判断と枠付けたりする傾向が見られた。

見落としてはならないのは、報道の語り方次第で、そもそも上川氏が麻生氏の問題発言の被害者であったという事実さえ、次第に曖昧になっていくということである。冒頭でも述べたように、日本の政治において女性政治家に対する性差に基づく問題発言は後を絶たない。女性リーダーたちは、一方でそうした言語的ハラスメントにさらされながら、もう一方でそれに対する応答の仕方までもが注視され、沈黙しても、声を上げて、評価の対象となる。この状況こそが、女性政治家たちが直面する二重の負担——ハラスメントを受ける立場に置かれながら、それにどう応答するかまでもが再び評価の対象となるという苦闘——を浮き彫りにしている。

本稿は、こうしたメディア言説を批判的に検討することを通じて、言語・ジェンダー・権力・社会規範の交差性に関する議論の一端を提示した。言語表現の分析によって、社会における性差の認識のあり方を可視化し、今後のジェンダー格差是正に向けた議論への一助となれば幸いである。

参考文献

- Brown, L. (2023). "The denigration of Korean men's genitals" Precision grip gestures and the multimodal construction of "taking offence" in media discourse surrounding anti-feminism in South Korea. *Journal of Language Aggression and Conflict*, 12 (2), 234-262.
- 遠藤織江 (1992) 『女性の呼び方大研究－ギャルからオバさんまで－』三省堂
- Enfield, N.J. (2022). *Language vs. reality*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Fillmore, C.J. (1976). Frame semantics and the nature of language. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 280 (1), 20-32.

- Hinds, J. (1986). *Situation vs. person focus*. Tokyo: Kuroshio.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館
- Inoue, M. (2006). *Vicarious language: Gender and linguistic modernity in Japan*. Los Angeles: University of California Press.
- 金子智樹 (2021) 「日本の新聞の左右論調: 1970年-2019年」『選挙研究』37 (1): 33-46
- 中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』岩波書店
- World Economic Forum. (2025). *Global Gender Gap Report 2025*.
- Yamamoto, Mutsumi. (2008). *Agency and impersonality: Their linguistic and cultural manifestations*. Amsterdam: John Benjamins.
- (よねざわ ようこ シドニー大学人文学部言語文化学科専任講師)